

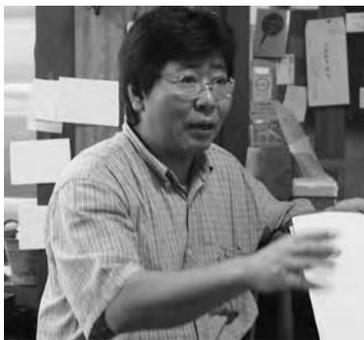
本町土地区画整理事業計画図



インタビュー

「この街を残すために頑張った」

市街地再開発の大きな目的のひとつである「商業の活性化」に向けて、地元を中心市街地まちづくり協議会（樋口均会長）を中心に議論が続けられています。協議会の役員である片山義之さん（四十七歳）と畑文雄さん（五十三歳）・容子さん（五十四歳）ご夫妻にお話を伺いました。



片山義之さん

洋服店を営んでおられる片山さんは「協議会では仮換地の素案作りに一年半をかけてきて、やっと本格的に仮換地に基づいた『街並みデザイン』などに取り組みめるようになってきた。街の統一感や住みやすさ、落ち着いた街並みを実現するために、壁面の色、セットバック（壁面後退）、高さ

制限などについて議論している。また、京都伝統工芸専門学校の学生さんたちと、作品の活用や工房のことなどについて連携していきたい」と話されました。花店を営んでおられる畑文雄さんは「商店には厳しい時代。郊外の大きな店舗だけではなく、昔からの商店が行き残っていきける街にしたい。店舗数の減少はなんとかしても避けたい」と語っておられました。

また、畑容子さんは「南丹市の中心市街地として園部町内外からも出店して欲しいけれど、今回の換地では空いた場所がなくて」との心情も語ってくださいました。

協議会では、これまでに七十回程度の話し合いが開かれており「仮換地の素案作りの前段階での地元アンケートでは、なかなか実現性のあるものとは受け止めていただけなくて困った」と苦労話も。また、仮換地の指定までは、情報開示ができなかったため「一部の役員だけがやっている」と見られることもあったそうです。「課題は多いけれど、これからは行政の支援も得て、この街を残すために頑張りたい」と一様に語っていただきました。



畑文雄さん